

もの自然を無視した育児の方法が子どもの生理にたいしてに深刻な影響をおよぼしその発育を阻害することがあるか、これは具体的な中身はともかく時代をこえてわれわれもたえず思い返し続けなければならない問題というべきであろう。

もっとも、乳母ははじめのうちこそ「よくない母親」だったとしてもやがては習慣のおかげで母親の愛情を持った「よい乳母」となってくれる場合もあるであろう。しかしそのような場合でもそこにまたあらたな不都合が生じてくるとルソーはいう。それは育児にあまり手間がかからなくなった段階で実の母親がふたたび自分の懐に子どもを取り戻そうとするときに起きる問題であって、子どもは母親よりも乳母のほうにはるかに強い愛着を示すということである。そしてそのようなさいに取られる一般的な方法は乳母をまったくの使用人としてあつかい、そのことによって子どものなかに乳母にたいする軽蔑の念を起こさせることであつたらしい<sup>8)</sup>。ところでルソーはこうしたやり方にたいしては次のようにコメントするのである。「乳母にとってかわって、自分の怠慢を残酷な行為によってつぐなつたと考えている母親は、思ひがちがいをしているのだ。恩知らずの乳飲み子をやさしい息子にすることはできずに、そういう女性は子どもに恩知らずな行為を教えているのだ。その乳で自分を養ってくれた者と同様に、自分に生命をあたえてくれた者も、いつかは軽蔑することをおしえているのだ<sup>9)</sup>」と。しかしここで考えておかなければならないのは子どものころにおいて再生されるこのような忘恩のメカニズムではないであろうか。ひとたび忘恩な態度を乳母にたいしてとることを学習した子どもがなぜ同じ態度を生みの親にたいしてもとるようになるのであろうか。一言でいえばそれは乳母との関係を通して子どものなかに形成されつつあった人間にたいする信頼が正反対の不信に変わってしまったからではないであろうか。今日的な言い方をすれば A.

H. マスローのいわゆる安全欲求 (the safety needs)<sup>10)</sup> が子どもにおいて充足されはじめた矢先にそれが暴力的に蹂躪され、かえって反対に K. ホルネイが主張したような基底的不安 (the basic anxiety)<sup>11)</sup> へと変質してしまったからではないだろうかということである。やや大げさな言い方あえてするならば子どもの乳母との親密な関係を引き裂くためになされた心ない言動が乳母と子どもの個人的な関係を超えて子どものなかに対人不信という子どもの人生全体に尾を引く可能性すら考えられる一定の構えを子どもの性格のなかに刻み込んでしまったのだということもできるであろう。

#### b. 感覚と運動

さて子どもの身体的精神的な発達にたいして重大な影響を及ぼすと考えられる当時の乳幼児期の子どもにたいするこうした扱い方に含まれている問題点を指摘したあとルソーは次にこの段階の子どもに固有な心身の特性とそれにふさわしい対処の仕方について自分の考えを述べていく。まず生まれたばかりの子どもは自分でみずからの欲求を満たすことができないので泣くことによって他人に助けを求めるという点にふれて次のように述べる。「人間の最初の状態は欠乏と弱さの状態だからその最初の声は不満と泣きごとだ。子どもは欲求を感じてもそれをみだすことができず、叫び声をあげて他人のたすけをもとめる。腹がすき、のどが渇けば泣く。寒すぎても暑すぎても泣く。身を動かしたいのにじっとしておかれると泣く。ねむたいのに動かされると泣く。かれの気にいらぬ状態にあればあるほど、それを覚えてもらいたいときりにせがむ。子どもはただ一つの言語しかもたない。いわば、ただ一種類の不快しか感じないからだ<sup>12)</sup>」と。ところでこのような子どもの泣くという行為にたいしては同時に注意深い観察が必要である。それは子どもの泣き声は最初のう

8) このあたりはすべて Cf. *ibid.*, p.257

9) *Ibid.*, p. 257

10) Cf. A. H. Maslow, *Motivation and Personality*, Harper & Brothers 1954

11) Cf. Karen Horney, *The neurotic personality of our time*, Routledge & Kegan Paul, Ltd., 邦訳「現代の神経症的人格」『ホーナイ全集』第二巻、誠信書房

12) *Ibid.*, p. 286